小説 筆祭競介
挿絵 雪月竹馬

立ち読み版

序　章　子供部屋の『みんしゅしゅぎ』　006
第一章　僕が生徒会長に⁉　016
第二章　有権者から逃げ出す立候補者　046
第三章　明日から二人は敵同士　099
第四章　迷いを断ち切るお姉ちゃん　136
第五章　生徒会長選挙　決戦の日　171
第六章　はっぴぃマニフェストの第一歩　192
終　章　裏庭の野菜畑で　247

登場人物紹介

Characters

誠門院崎（せいもんいんざき） まどか

旬平の幼馴染みで学園の生徒会副会長。父は国会議員を務めている。七菜子のライバル（？）。

燐堂（りんどう） 七菜子（ななこ）

高等部二年生で、野菜クラブの部長。旬平とは幼馴染みの姉（兄貴？）的存在。

パトラ・ブルーウインド

アメリカからの留学生で野菜クラブの女子部員。元気一杯で陽気な性格。巨乳。

綾瀬川（あやせがわ） 瑞穂（みずほ）

高等部一年生。名門料亭の娘で天然系のおっとりした性格。野菜クラブの一員。

天川（あまがわ） 旬平（しゅんぺい）

土いじりが大好きな野菜クラブの男子部員。ボサボサ頭に牛乳瓶メガネをかけた冴えない少年。高等部一年生。

「たしか……マンガだとコーしてたヨナ」
パトラが両手を胸元に寄せ合わせたまま乳房を揺すり始めた。ザーメンが1リットル出る漫画なだけに、さぞかし過激な内容だったのだろう。左右交互にバストを揺すぶり中のペニスを捏ね上げてくる。スタート時こそ、その手つきはタドタドしかったが、運動神経抜群の彼女らしくすぐに勘を掴むと、あとは巧みに胸を揺すってきた。
「はくっ！　っ……はくううっ！」
肌理の細かい乳肌に擦られて息むような喘ぎ声が止まらない。張り詰めた乳肉が両手によってムッチリと張り詰め、中の男根に極上の圧力をかけてくる。七菜子のフェラによってまぶされた唾液もいい具合に潤滑効果を発揮していた。ビキビキに剛直した牡肉の表面を、だっぷりとした牝肉が形を変えて扱いていく。
ずにゅん、ダプダプっずちゅだぷぷン。
牡竿を滑らかに擦っていく柔肉が、径の太い亀頭の出っ張り部分でギュっと圧力を増す。まるでカウパー液を絞り出すような乳房の動きにペニスが筋張る。ただ挟まれているだけでもイキそうなのに、こんなにもこってりと扱かれてはたまらない。無意識に腰回りがピクピクと痙攣し始めていた。
「オオゥ。さきっぽがヌルヌルしてきたヨー」
パトラが上半身の位置を少しずらして先端部分を練り込むように乳房を躍らせ始めた。

なにぶん、身体を動かすことにかけては抜群に勘がいい女の子である。

――おっぱいの中がもっとヌルヌルしてきて……滑りがもっとよくなってきちゃった。

密閉された巨乳の狭間に先走りの汁が塗り広がり、さらにパイズリの快感が高まった。厚みのある乳肉をダイナミックにぶるんぶるんと揺さぶりながら、中に埋めた肉棒を捏ね回される。鳩尾まで震えるような愉悦に追い詰められていく。食いしばる口許からはだらしなく涎が一筋垂れ流れ、あまりの快感で突発的に何度も目の前が白く瞬いた。

「はああんっ……シュンペーの……凄くビクビクしてるヨぉ」

激しく身悶える少年の様子に目を丸くしている左右の七菜子と瑞穂に比べ、直接ペニスを責めているパトラのほうが戸惑いが少ないようだ。

「もっと、こうするとしっかりズリズリできるみたいダヨ」

手を使って乳房を動かすわけではなく、上半身ごと身体を揺すり始めた。金髪のポニーテールがふわっふわっと上下するたびに強烈な快感が股間で炸裂する。これだと掌でしっかりペニスを挟んだまま、なおかつダイナミックに扱くことができる。

どこまで勘がいいのだろうか。一杯に開いたパトラの指は深くバストにめり込み、その全圧力を己の乳肉を通して中に埋まるペニスにみっちりとかけてくる。その状態を維持したまま乳房を揺すられるのだからたまらない。このパイズリは童貞少年が耐えられる肉悦の限界を軽く超えていた。

「っ……出るっっ……も、もう、でちゃうっ……っくううっ！」
「えっ⁉　も、もうなのカ？」
いくら勘がよくてもエッチ漫画で仕入れた知識だけでは、男の生理など正確にはわからないだろう。こちらにしてみれば七菜子のフェラを受けた直後ろに挟まれて、すぐにイカなかっただけでも上出来だ。パトラは青い瞳をパチクリさせて赤毛の部長に視線を向けた。どうやら事前の予定が狂ったらしい。しかし普段は頼もしい我らがリーダーも後輩同様に目をパチクリさせている。
「と、とにかく、その……シュン坊！　お、お前どうして欲しいんだ！」
七菜子にしては珍しく焦った口調で聞いてくる。もうここまできて中断されては、それこそたまらない。
「つ、続けて……さ、さっきみたいにおっぱいで僕をシコシコしてええっ！」
恥も外聞もなく、極上のフィニッシュを迎えるためにそうリクエストしていた。
「わ、わかったヨ！　これでイインだナ！」
パトラが再びメロンサイズの巨乳を勢いよく揺すり始めた。両手を動かし上半身まで上下させているため、様々な角度と力加減でペニスが扱かれる。ぬちゃぬちゃと湿った音が響くのは、二人の汗と七菜子の唾液と己のカウパー液が混じり合っているからだ。
――こ、このパイズリっ……ハンパない！

自ら乳を谷間に寄せるパトラの指には傍目にもわかるほど力が籠っている。その圧力のほぼすべてが愉悦の圧迫感となって中の男根を絞り上げる。適度なぬめりがあるためにいくら強く扱かれても痛みはない。柔らかな乳肉にしっかりと男根を挟まれながら扱かれる快感に限界を鋭く叫んでいた。

「そ、それいいっ！　あっイクっ！　パトラのおっぱいでいっちゃうよおぉおぉッ！」

無意識に腰を突き上げていた。旬平の下腹部が分厚いクッションのような下乳にめり込み、真っ赤に充血した肉先が深い胸の谷間からほんの僅かだけ顔を覗かせる。

ドりゅんっ！

先端の小穴から弾き跳んだ白濁の粘液が、パトラの細い顎に直撃して粘っこく爆ぜた。綺麗な肌がピンク色に上気していただけに、飛び散るザーメンの白濁が卑猥に映える。

どりゅドグどぎゅどプどりゅどぷププっ！

その光景に刺激され、二弾、三弾と続く射精も勢いを衰えさせない。柔らかな圧迫感の狭間で極上の脈動を貪った。

「アンっ。あついヨぉ」

止めどなく溢れ出るザーメンにパトラが甘い吐息を漏らす。顎の裏に直撃した肉汁の勢いがよすぎて頬に一本白濁の筋が走っていた。それがトロトロと下に流れ、形のよい顎から糸を引いて滴り始める頃、やっと牡欲の排泄が終わる。

「っ……つはあああぁぁ……」
深い溜め息とともに全身の強張りを解く。と、パトラが胸で挟んで離さなかった男根を解放した。ぶるん、と柔肉が揺れて元の形に戻る。
細い首筋や鎖骨の窪み、豊かに盛り上がったバストの丸み、それを支えていた指に至るまで、旬平の吐き出した欲情に彼女の上半身は白く汚されていた。深い胸の谷間には、むっちりとした柔肌に赤いスレ跡が残っている。激しくペニスを扱いていた証だ。べったりとへばりついている白濁液がその谷間をトロトロ伝い、たっぷりとした下乳の底からネトーッと糸を引いて滴っていく。その卑猥な光景を眺めているだけで、果てたばかりの男根がすぐに元気を取り戻しそうだ。粘りつくザーメンからは牡臭い匂いまで立ちのぼり、パトラの美巨乳を視覚だけではなく嗅覚でも汚していた。
「えーと。こ、こーいう場合は女慣れしたことになるんですか？」
初めて目の当たりにしたであろう男の生理現象に、圧倒されていた瑞穂が気を取り直したように口を開く。
「こんなにハヤくイッちゃったら、ダメなんじゃないカー？」
その瑞穂から受け取ったポケットテッシュで白い汚れを拭いながら、パトラがいつも通りのあっけらかんとした口調で呟く。
「1リットルも出てないみたいだしな」

結局、女性陣三人の視線は当事者である旬平に集中した。
「どう、天川クン……もう、女の子に慣れた？」
瑞穂に顔をグッと覗き込まれると、前ほど酷くはないが無意識に腰が引けやはり顔が赤くなってしまう。それを見てパトラが「ほらナー」と得意げな笑顔を見せ、七菜子が瑞穂の背中をバンと叩いた。
「シュン坊がすぐにイッちまったから予定が狂ったけど、次はお前の番だったんだから、――続けて仕上げをしろ」
やはり事前に三人でそれぞれ分担を決めていたらしい。僅かに顔を赤らめた瑞穂が後ろを向くと、七菜子がツイと顎をしゃくりパトラがグッと親指を立てた。そんな二人に対し、いつもホンワカしている瑞穂の顔が、なにかを決意したようにキッと鋭くなる。
「あ、あの……綾瀬川さん？　仕上げっていったい……ってわわわっ！」
戸惑っている旬平の顔を再び黒髪の少女が覗き込んでくる。清楚な美貌が少し熱っぽく火照って見えた。
「私もこのクラブがなくなって天川クンや皆と離れたくありません。だから私も天川クンと一緒で……自分ができることならなんでもします」
いつものようにおっとりと微笑むのだが、頬が桜色に染まっているためまるで別人に見える。七菜子やパトラのときもそうだったが、それだけでやけに色っぽく見えるのだ。そ

の表情にぽーっと見惚れていると、薄桃色の唇が「だから……」と甘く囁きながら急接近してきた。

――綾瀬川さん……。

瑞穂の意図を悟った旬平は今さら逃げようとはしなかった。

自然と瞳を閉じたその直後――チュッ。二人の唇が重なった。瑞穂の甘い吐息と、ふんわりとした口唇の柔らかさを実感し胸がドキンと跳ねる。

「んっ……んんんっ……」

こちらの首筋に絡めている少女の両手に悩ましげな力が籠った。旬平も自然と両手が伸びて瑞穂の背中を抱き締めている。

「すごいヨー。シュンペーがもうゲンキになってキター」

先ほどあんなにパトラの胸にぶちまけたのに、男の象徴は完全に力を取り戻していた。二人はゆっくりとキスをといて至近距離から見詰め合う。しかし普段から何事につけ朴訥としている二人である。お互いにポーッと見詰め合ったまま、なかなかそれ以上の行為に進めない。

「……まったく、世話が焼ける奴らだな」

見かねた七菜子がボリボリと頭を掻きながら近づいてきた。

「ああン。もう燐堂先輩ったら、はずかしいですよぅ」

戸惑いの声を上げる瑞穂にお構いなく、野菜クラブ部長は彼女の腰横にある制服のホックを外した。ストン、とスカートが落ちて純白のパンティが現れる。

男の自分とはまったく作りの違う下半身に視線が吸い寄せられた。

細いのにちゃんとメリハリがあり、それでいてギスギスと筋ばっていない両脚。高い位置にある太腿の付け根から股間を覆っているシンプルなデザインの白いショーツ。細いウエストから腰にかけてのくびれたライン。そのいかにも女の子らしい曲線美に我を忘れて見惚れてしまう。

「ホレ。お前も一応、男だろ。あとはシュン坊が脱がしてやれよ」

七菜子に言われ固まっていた視線をチラリと黒髪の少女に向ける。視線が合うと、さすがの瑞穂でも一瞬両目を丸く見開いた。が、すぐに恥ずかしそうに両目を閉じる。

――脱がしても……OKってことだよね……。

そのことを口に出して聞くほどヤボではない。一度、深呼吸をしてから白いショーツに手を伸ばす。手触りが自分の穿いていたトランクスとは違いとても柔らかい。胸をドキドキさせながら、震える指先でゆっくりとそれを下ろしていった。今までならこの状況だけで鼻血を盛大にぶっ放し意識を失っているところである。が、一度抜いているのでその心配はなさそうだ。七菜子やパトラのおかげで多少は女の子慣れしてきている。

「う、うわぁ……」

ただでさえ白さの目立つ肌をしているが、下腹部の白さはなお際立っていた。それだけに、柔らかな芝生のようにフサッと茂っている陰毛の黒さが目に映える。両脚を閉じ気味にしているために、この位置からはっきりと彼女の秘処を窺うことはできなかったが、男の自分とは文字通り作りの違う下半身に視線が釘付けだ。

細いのにふっくらと柔らかそうな質感を想像させる太腿の肉付き。突起物のないなだらかな股間と黒い茂み。童貞の旬平が再びフリーズしてしまうのに充分な光景だった。対して瑞穂は下着を脱がされてからは両手で顔を覆いモジモジと恥じらっている。

クールな七菜子やあっけらかんとしたパトラと違い、やはり旬平と瑞穂の組み合わせではなかなか先に進まない。

「ったく……」

七菜子が再び「はぁー」と溜め息をつく。そしてバンと黒髪の後輩の背中を叩いた。瑞穂はそれだけで膝がカクンと崩れ、椅子に座ったままの旬平の膝の上にちょこんと腰を下ろす格好になってしまう。

「あっ、きゃっ⁉　……ご、ごめんなさい」

さすがに顔を両手で隠し続けるわけにもいかず真っ赤な顔をして旬平に謝ってくる。こちらは突然、密着した太腿やお尻の柔らかな感触と、ほのかに漂う黒髪の優しい匂いで急激に頭に血が昇った。目が血走りまともに返事をすることができない。

なにしろ相手は初恋相手である。幼い頃の憧憬の気持ちと、今現在の美しく成長した女体の感触が、いつもは奥手な少年を獣に変えた。

――まどかちゃんの身体の感触がたまんない！

彼女の背中を抱き締めている両手が卑猥に動く。左手はまだ少し湿り気を帯びた髪を撫で、右手は引きつけるようにくびれた腰を抱いた。指先を下に這わせていく。身体の骨格はパトラほど大柄でもなく、瑞穂ほど小柄でもなく、この年頃の女子らしいサイズだ。適度に発達した筋肉と、成熟しかけている牝肉のバランスのよさが際立っている。

「んんんっ……っ――あんっ」

バスローブの上からヒップを撫でる。分厚い生地越しでもわかるまろやかな感触に、自然と指先に力が籠る。

――もっとまどかちゃんの身体を……じ、じかに触りたい……。

左手が尻を撫でながらバスローブの裾を探り始めた。こちらの意図を察したまどかがハッとして顔を見上げてくる。

「あ、あの……た、立ったままだと……あ、危ないですわ……」

頬を桜色に染めながらチラチラと横にあるベッドに視線を向ける。それは、いま旬平がしようとしていることを、横になってしようという合図だろうか。その意味を考えて、むふー、と突風のような鼻息を両穴から吐き出し――。

「う、うん！」
幼稚園児のようなテンションで頷いていた。こちらの興奮しきった様子に、これまでモジついていたまどかがプッと吹き出す。そこで初めて自分の滑稽な姿を自覚して、耳の先まで真っ赤になってしまった。
「そ、そんなに笑わないでよ……まどかちゃん」
恥ずかしさをごまかすために、彼女をベッドに押し倒した。
「あん――うふふっ。ワタクシのことさっきから……昔みたいに名前で呼んでくれていますわね」
普段のなにかに構えているような力みが彼女の表情から消えている。いつもキッとしている凛々しい眉が緩み穏やかな顔をしていた。
「あっ……」
そのお姉さん然としていた表情が急激に赤くなる。まどかは視線を逸らすように横を向いた。旬平は小首を傾げ、彼女が顔を赤らめたところに視線を向けてみる。
――わわわっ。
羽織っていたバスローブの間から、充血しきった男が剥き出しになっていた。パンパンに薄皮を張り詰めさせている亀頭と、赤と青の血管をビキビキに盛り上げさせている肉幹。初めてコレを見たのなら、さすがのまどかでも赤面して当然である。そう思った直後、頭

によぎった疑問が口からこぼれだしていた。
「まどかちゃん……こ、こーいうことするの……はじめて？」
デリカシーのない質問に、栗毛のお嬢様は顔を横に向けたままビクッと身体を震わせた。こちらに向けている耳が急激に真っ赤に染まっていく。いくら鈍い旬平でも、この反応を見ただけで彼女が処女だということが察せられた。そう実感すると、なんだかこちらまで急に緊張してきてしまう。
「や、優しく……するからね」
絞り出すようにそれだけ言うと、まどかの上に覆いかぶさった。先日の瑞穂との初体験は、結合直前までほとんど七菜子が導いてくれた。しかしそんな情けない内容でも、一度経験しているというのは自信になる。何事においても、自分よりはるかに早熟であろう一歳年上の幼馴染みより、一歩先んじているという事実がなんだかくすぐったい。
——まどかちゃんの初めてだもんな。とにかく焦らないように……。
横を向いている相手の頬にチュッとキスをすると、顔を赤く染めたまま恥ずかしそうに身体をよじった。その愛らしい仕草だけで急激に頭に血が昇る。ドキン、ドキン、と心臓が強く脈打つ。欲情の赴くまま彼女の身体にむしゃぶりつきたい欲情を抑え、なにはともあれ一度深呼吸。そして改めて両手をバスローブに伸ばし、その結び目を解いた。
両手で彼女の胸元を開く。

――うわぁ……キ、キレーなおっぱい。

パトラほどの巨乳ではないにしても、この年頃としては充分に実ったサイズなのではないだろうか。大きめのお椀を伏せたような美しいドーム型をしている。それでいて頂点に乗っている桜色の突起は、乳暈も含めて小振りな一口サイズだ。

「……し、下も……み、見ていいよね？」

いちいち相手の同意を確認してしまうのが、旬平の気の弱いところである。

「……う、うん」

それにいちいちこたえてしまうまどかも歳相応にウブだった。普段、学校で漲らせている大人びたリーダーシップの欠片もない。明日から生徒会長の座を競おうという二人は、性に奥手なただの少年、少女に戻っていた。

旬平は腰の前に重なりあっている彼女のバスローブを両手の指先で摘むように持った。まるで高級な陶器を包む布でも開くように、ゆっくりとめくっていく。

――こ、これがまどかちゃん……。

初恋相手の牝華は頭髪と同じ栗色の陰毛の下に咲いていた。ぷっくりと膨れた瑞々しい大陰唇の内側から、濃いピンク色の襞たちが幾枚かヒラヒラと覗いている。大きく実った胸と同じく、こちらもかなりの咲き具合なのではないだろうか。少年の鼻息を荒くさせたのは、小陰唇のさらにその奥にある生々しい牝粘膜の赤みがかった色合いである。

初体験の時は体位が座位だっただけに、ほとんど相手の女性器を目にしていない。思えば、こんなにもハッキリと女の入り口を見るのは初めてだ。

――た、たまんないよぉ。

もっとしっかり彼女を観察するために顔を近づける。見た限り女の蜜で潤っている感じはしない。漂う匂いも、シャワーを浴びた直後の爽やかなソープの香りだけだ。

――まだ……これって、濡れてないってことだよね。

たいした愛撫もしていないので当然だ。しかし指で直接女性器を責めては爪で傷をつけてしまうかもしれない。旬平はベッドの上で腹這いになるとさらに顔を近づけていった。

「あっ、そんな、いきなりっ――っあん！」

こちらの意図を察して閉じかけられた太腿を両手で制し、突き出した舌が目的地に到達する――ぺろっ。ぺろぺろっ。

初恋相手の入り口を舌を使って慎重に湿らせる。いったいどうすればいいのかわからなかったので、目につくものをたどたどしくねぶっていった。大陰唇からめくれるように、その谷間から露出している肉ビラたちを一枚一枚なぞるように舐めていく。

初めて口にする女性器はシャワー直後ということもあり、はっきりと味を感じることはなかった。それでも感触は味わえる。粘りつくような牝襞の弾力を堪能しながら、そのすべてを己の唾液でヌルヌルにしていった。

チラチラとまどかの顔を窺うと、彼女は両目をソッと閉じて、旬平の舌に意識を集中しているような表情をしていた。舌先に強く力を込めて舐めたとき、眉間に悩ましげな皺を寄せる敏感さがたまらない。自分が異様に興奮していることを、彼女の股間で反響する己の鼻息の荒さで自覚した。

「っ……っうんっ……んくふっ！」

クンニを始めてからずっと、くぐもった喘ぎ声を漏らしていたまどかが軽く背筋を仰け反らせた。牝華の上でぽちっと膨らんでいる肉芽に舌を伸ばしたときである。どうやらココが特別弱いらしい。舌先で包み込むように舐めていると、ヒクンヒクンと太腿の内側が痙攣した。あまりに敏感なレスポンスに舌の動きが止まらなくなる。夢中でその突起だけを舐め転がす。すると爽やかなソープの匂の中に、甘酸っぱい牝の香りが混じり始めた。

――うわあぁっ……。

視線を下に向けて目を見張る。己の唾液でヌルヌルにした牝裂の谷間から、さらに粘度の濃そうな蜜液が溢れ出していたからだ。その光景とそうなった意味を考えただけで、勃起しっぱなしの男根が勢いよくヘソを叩く。

もうここまでが旬平の我慢の限界だった。

一刻も早くまどかが欲しい。初恋相手と一つになりたい。

腹這いから膝立ちの姿勢に戻り、鼻息荒く彼女の大きく開いた脚の間に両膝をつく。濡

れた肉裂に赤銅色に充血した己の男根を差し向けた。
「い、入れるよ……」
言葉が興奮と緊張で露骨に上擦り、情けないほど掠れてしまう。
「……う、うん」
そう頷くまどかの瞳は、股間と同じように熱く潤んでいた。
先端が濡れ光る膣襞たちにちゅぷりと密着した瞬間、二人の口から甘い吐息が漏れる。肉先にジンと染みる蜜壺の熱さと潤いに理性が吹き飛びそうになる。ガムシャラに突入したい性衝動を奥歯を噛みしめグッと堪えた。
――まどかちゃんの初めてなんだぞ。優しくしないと絶対にダメだ。
胸中で何度もそう繰り返し気持ちを落ち着けてから、ゆっくりと腰を突き出していくのだが――つるん。上手くいかない。
なにしろ自分でセックスを決めるのはこれが初めてである。肉先が牝裂の溝に沿いながらも外れてしまった。敏感な部分を灼熱の肉棒で擦られてまどかの身体がビクンと跳ねる。
「あ、あれ？　なんで……あの……あ、あれ？」
自身を牝裂に埋め込もうとするのだがなかなか上手くいかない。膣襞たちが覗いている裂け目の真中に狙いを定めているのだが愛液で滑ってしまう。二回、三回と外すたびにだんだん気持ちが性欲とは別の意味で焦ってくる。

「……お、落ち着いて……ね」
結合に手間取るこちらを気遣い、処女であろうまどかが微笑んだ。これではどちらが経験者なのかわからない。恥ずかしさで頬がカッと火照る。もう、こうなったら格好をつけている場合ではない。自分の指を使って直接入り口を確かめることにした。
「……ご、ごめん。……痛かったりしたら、すぐに言ってね」
これが挿入時のセリフではなく、挿入場所を探すためだというのだから情けない。まどかのアソコを傷つけないようにするため、己の唾液を右手の人差し指にたっぷりとまぶしてから、それを恐る恐る彼女の股間に差し向けた。敏感な指の腹で縦にざっくりと割れた牝裂を慎重になぞっていく。
クンニをしたときに、この内側までしっかりと舌先で探り位置を確かめておけばよかったのだが、その前に我慢できなくなってしまったのだからしょうがない。
――あった。こ、ここだ……。
やっと細い肉路を指の腹で発見した。牝華を前から見た場合、かなり下の位置にある。これでは牝華の中心部分ばかりを狙っていた自分が上手く嵌められないはずだ。
「も、もう一度……いくよ」
焦る気持ちをとにかく抑え、見つけたばかりの入り口に男根を差し向ける――ちゅぷり。
あった。先端の敏感な部分が牝の窪みにあたっている。直後、まどかも全身をヒクンと

痙攣させた。見下ろすこちらと視線が合うと頬を桜色に染めたままコクンと顎を引く。
その頷きが『そこだよ』と言っているのか『いれていいよ』と言っているのかわからない。ただ、彼女が自分を受け入れようとしていることだけは、いくら鈍い旬平でも察せられる。そんな相手にこちらも一つコクンと頷いてから、ゆっくりと肉先を沈めていった。
「あっ……今、入って……きてる……っ……シュンくんの凄く熱いのが……はくんっ！」
入り口でモノ凄い処女肉の抵抗を受ける。無理に入れてはまどかが怪我をするかと思うとその腰付きも慎重になった。なにしろ今回はすべてを旬平がコントロールしなくてはならないのだ。初体験時の座位と違い相手のペースでずっぷりとはいかない。
「まどかちゃんの中――めちゃくちゃ狭いのにヌルヌルしててっ……っくふあっ」
なにより処女孔の異物に対する抵抗感が凄かった。両手で彼女の太腿を抱き、女体を逃がさないようにして腰を沈めていく。先端で発生している無理矢理女肉に穴をこじ開けていくような感覚がたまらなかった。ミチミチとしなやかな牝路の中を突き進んでいく充足感に、背筋がゾクゾクと震える。その強烈な締めつけは、痛みとなる一歩手前の絶妙な力加減で中のペニスに極上の愉悦をもたらした。
「っ……っくっ……ふはっ……っ――ふあああぁぁぁぁっ！」
男の侵入をくぐもった喘ぎ声を漏らし受け入れていたまどかが大きく仰け反った。掴んでいた太腿がビグンと跳ね、縦に割れた形の良いヘソが腹筋ごと激しくうねる。

第四章　迷いを断ち切るお姉ちゃん

「そ、それじゃあ……っ……遠慮なく続けるからね」
セリフとは裏腹に充分に相手の反応に注意しながら、根元までペニスを埋め込んだ。これだけ慎重に行為を進められたのも、すでに二回経験を済ませていたからである。
「っ……っはあぁぁ……」
七菜子が止めていた息を深く吐いた。握り潰すように背中を掴んでいた両手からも力が僅かに抜ける。しかし初めて男を受け入れたばかりの膣襞たちは、ギチギチに収縮したまま中の締めつけを解こうとはしない。たっぷりと分泌している熱い愛液のおかげで痛みはないが、今まで経験した二人よりも明らかに女性器を取り囲む筋肉群が発達していた。物凄い膣圧だ。なによりビクビクと伝わってくる女体の痙攣の伝導率が半端ではない。それだけに肉の芯まで染み込んでくるような、高密度な一体感は格別だった。
「なんだか……す、凄いな……コレ。シュン坊のが喉元まで食い込んでるみたいで」
ハアハアと息を乱しているその表情には、苦痛だけではない官能の色が浮かんでいた。
「動くよ」
旬平の言葉に七菜子がコクッと頷く。
「どんとこい」
いかにも彼女らしいセリフで答える。
旬平はガッチリと掴んでいた彼女の両肩を放し鋭くくびれたウエストを掴んだ。ゆっく

りと相手の身体を揺するように動かし始める。とにかく慎重を心がけた。これだけ凄まじい密着感だと七菜子が怪我をする可能性もある。こちらも刺激が強すぎて少し動いただけで果ててしまうかもしない。

ぬずるんっ――彼女の牝肉にがっちりと食い込んでいた男根が、鋭い快感を迸らせながら膣壁を擦っていく。肉棒が削り込まれるような摩擦感に全身が強張った。気持ちよすぎる。予想通り、好き勝手にガシガシ動いてはアッという間に果ててしまう。しかし――。

「あんっ」

鼻にかかったような甘い喘ぎ声が聞こえた。この場には、自分以外に赤毛の『兄貴』しかいない。びっくりして相手の顔を見ると、七菜子も目を丸くしてこちらを見ていた。試しにもう一度全身を揺するようにして相手を貫く。

「ああんっ」

凛々しい口許が僅かに開き、脳味噌が蕩けそうなスイートボイスで七菜子が喘ぐ。とても直前に『どんとこい』と兄貴らしく言っていた口から出た声だとは思えない。彼女自身も同じことを感じているようで、ワイルドな美貌が羞恥でカーッと火照っていく。

――今のナナ姉ちゃん……めちゃくちゃ可愛い……。

こんなこと面と向かって口にしたら、後でどんな目にあわされるかわからない。その分感情が内に籠り少年をますます興奮させた。腰上に乗る相手の身体を揺する両手が無意識

に続きを催促する――ぐちゅんくちゅん、ぬちゅくちゅん。
「あんっ……っはあんっ……あんっあああんっ」
七菜子が上下の動きに合わせて甘く喘ぎ続ける。背中を抱き締めている彼女の両手も、この喘ぎ声を聞いていると、夢中でこちらにしがみついてきているように感じてしまう。
――それに……ナナ姉ちゃんのアソコ……凄く気持ちいい……。
行為の当初は痛いほど窮屈だった膣襞が、喘ぎ声と同様甘く溶けだしていた。膣襞たちも活発に動きだし、グツグツと煮込まれ糸を引くほどトロトロに蕩けたチーズにペニスが絡みつかれているようだ。その熱くて濃密な一体感に、いつのまにか旬平もハアハアと喘ぎながら顎が上がっていた。その仰け反る動きと、夢中でしがみついてくる相手とのウエイトバランスで――ドタン。
「っ……つはああっ」
旬平は押し倒されるように背中を床につけていた。座位だった体位が騎乗位に変化する。
――ふわぁぁぁ……す、凄い眺め……。
長身の相手を下から見上げる大迫力な構図に息を飲む。ただでさえスタイルのいい七菜子が制服を着崩して、胸だけを丸出しにしているのだ。山吹色のネクタイがプリプリと弾む乳房の谷間で揺れる光景が妙に卑猥で、少年の目を血走らせた。
それでいて下半身には靴下しか履いていない。自身の肉体を支えている引き締まった太

腿は官能的にヒクヒクと震え、剥き出しの臀部はその丸みを柔らかそうに揺らしている。フィジカル的な強さは男勝りなくせに、女体を象徴する曲線はどこもかしこも艶めかしい。

「っはあんっ……さっきから……あんっあん……アタシの身体……エ、エロい目でみやがって……はああんっ」

トロけるように甘い喘ぎ声と、多少上擦っているが普段通りの『兄貴』口調を交互に聞かされますます興奮してしまう。相手の身体を揺するだけで自ら動かさなかった腰を無意識に突き上げ始めていた。

「ああんっ！　ス、スゴっ、くふぅっ！　あんああんっ！」

こちらの動きに合わせて、鼻にかかったような喘ぎ声を漏らす七菜子の姿に、ますます腰の動きが加速していく。なにしろ瑞穂やまどかに比べ女体の反発力が半端ではない。

「お、奥にっ、ああンっ、と、とどいてるっ……シュン坊がっ……っ……はああんっ！」

真上に身体を弾ませていた七菜子がセックスの快感に耐えきれなくなったのか、上半身を前に倒した。両手を旬平の肩の横につき、まるで剥き出しのバストをこちらの目の前に突き出すような格好になる。

丸く張り詰めた乳房が自分の突き上げに上下する女体に比べ、ほんの僅かにタイミングをずらして揺れていた。空間的な位置といい、乳肉の弾み具合といい、下になっている自分に掴んでくださいと言わんばかりの淫らな光景である。無意識に手が伸びていた。

ずにゅ、むにゅむにゅんっ。
左手で七菜子の腰を掴んだまま、右手で柔肉の塊を鷲掴みにする。その揺れ具合から想像できる弾むような揉み心地が指先から掌にかけてに染みわたる。牡の条件反射できつく握り締めると七菜子の口から「あンっ」と鋭い喘ぎ声が漏れた。優しく揺さぶるように揉みしだくと、やはりそれに合わせて「あっあっんあぁあぁン」と甘く囀る。男根を絞る膣襞たちが連動してキュンキュンとざわめくのもたまらない。
「ナナ姉ちゃん、ナナ姉ちゃん！」
興奮しきった旬平は乳房をしっかり掴んだまま激しく腰を突き上げた。
ずちゅん、ヌチュぐちゅん、ズンずちゅぐちゅんっ！
あれほど窮屈だった膣襞たちが今では滑らかにペニスを絞り上げている。愛液の分泌量も申し分なく二人の激しい動きに合わせて、卑猥な音をグチュグチュと響かせていた。
「はあんっ……シュン坊のっ……でっぱりが中にゴリゴリあたって……くふん！」
七菜子は腰を踊らせるように上下させ、牝豹のような躍動感で性を貪り始めた。ペニスのカリ部分を自らヘソの裏側に擦りつけるような卑猥な動きである。剛直しきった肉棒は、幼馴染みのしなやかな膣襞たちに揉み洗いをされるように絞り上げられていく。
「今のナナ姉ちゃん……すっごくエロくて……でも可愛い」
どんな時でも野性的な煌めきを放つその瞳が、今だけは官能に潤んでいる。視線の力強

さが緩んだ分、七菜子の根本的な美貌が際立ち身震いするほど色っぽく見える。
「バ、バカ野郎……アタシがそんな、あ、あんっ……か、からかうんじゃねえ……」
恥ずかしそうに顔を赤くし僅かに顔を俯ける姿がより牡の獣欲を刺激する。いつもの男口調に混じり、女らしい甘い喘ぎ声が混ざるのがとにかくたまらない。行為を始めてから蓄積され続けたそのギャップに、理性のダムがとうとう決壊する。
「ホントだよ！　今のナナ姉ちゃん、す、すごく……すごく綺麗で色っぽいよ！」
普段見せる『男らしさ』との落差が激しいだけに旬平の興奮も天井知らずだ。すでに限界が近く、あっさり果てないようにグッと奥歯を噛みしめた。身体を躍らせれば躍らせるほど、腰の奥に凄まじい愉悦の塊が発生し、どんどんとその圧力が跳ね上がっていく。
「っはあっ！　そんなに激しくされたら、すぐにイッちゃうよぉぉ！」
七菜子の女体は瑞穂やまどかにはないキレのよさで腰を躍らせ、男女の結合部分から愉悦の愛液をピチュピチュと撒き散らしていた。ピンと立ったクリトリスをヌルヌルに濡れ光らせ、股間から甘酸っぱい牝の匂いを立ち昇らせている。しかしいくら挿入に慣れスムーズにペニスを出し入れしていてもパイパンヴァギナの見た目は変わらない。その腰付きが激しければ激しいほど、幼い性器とのギャップによる卑猥さが強調される。
「んなこと言われても、はあんっ！　身体が勝手に動いちまって、っああっ！」
クリンクリンと横方向に滑らかな楕円を描いていた七菜子の腰が、ズコズコと中のペニ

スを揺さぶるような上下運動を開始した。膣の内側をびっしり埋めた牝襞たちが、男根の全面を舐めるように扱き上げる。亀頭と裏筋の敏感な段差をグジュグジュと擦っていく快感に旬平は背筋を仰け反らせた。もう限界だ。これ以上、行為を引き伸ばすよりも、最高のフィニッシュを迎えるために身体が勝手に動いていた。

両手で七菜子の乳房を鷲掴みにし、相手に任せっぱなしだったセックスの動きを再開させる。性器で繋がったまま腰に乗っている女体を獣じみた勢いで突き上げた。

ズズじゅん！　ぐズじゅずんっ！　ズじゅズじゅぐじゅンっ！

瑞穂相手に駅弁スタイルでフィニッシュを決めたほど体力はある。幼い頃から畑仕事で鍛えられた旬平の腰は、スマートな身体付きに反してとてもパワフルだ。

七菜子の細い顎がガクンガクンと躍り、赤毛のロングヘアが宙を舞う。その光景に腰の動きが止まらない。

対して七菜子はその凛々しい瞳を細め、眩しそうにこちらを見詰めている。弟だと思っていた相手に為すがまま突き上げられ、甘く喘がされている現実に彼女も感慨深そうだ。眉間に軽く皺を寄せている表情からは、それが嬉しいのか悔しいのか読み取ることができなかった。

「あんっ！　シ、シュン坊っ……そんないきなり、ああっ！　あああああぁぁぁ！」

こちらの激しい動きに比例して七菜子の動きが止まっていく。両膝をついた状態で、今

では襲い来る官能に対し踏んばるだけになっている。それだけに、ただでさえキュンキュンな女性器の締めつけがさらに増していた。溢れんばかりの愛液にまみれながら、牡牝の性粘膜が溶け合うような一体感である。

――ナナ姉ちゃんの身体が凄くビクビクしてる！　ナナ姉ちゃんも感じてる！

真下から襲う快感に耐えきれず上に逃げようとする相手の身体を、両手で乳房を握り締めることで阻止していた。あれほど滑らかに動いていた彼女の腰は少年の動きに圧倒され、現在身体を支えるだけとなっている。

「お、奥にっあたってるぅ！　シュン坊のがゴンゴンおくにあたってるうぅぅっ！」

女体を深く貫く快感に彼女は屈し、ハンサムな美貌は甘く緩みきっていた。凛々しい瞳はギュっと閉じられ、いつも不敵な笑みを浮かべる唇を喉の奥が見えそうなほど大きく開いて喘いでいる。伏せた睫毛を官能的にフルフルと震わせ、口から漏れるすべての言葉が牝の嬌声と変わり果てていた。

「ひひゃあんっ！　奥からなにかでてきそうっっ　あンっ、らめっ、あ、ああんっ！」

激しく身悶える艶姿に加え、呂律まで乱れたこの喘ぎ声である。視覚と聴覚を同時に官能で塗り潰され、男根で渦巻く快感が限界まで跳ね上がる。もうイキそうだ。グツグツと煮え滾った精液が込み上がってくる感覚に、旬平は両目をギュっと閉じていた。

「で、出るっ！　ナナ姉ちゃんの中でイッちゃうううぅぅぅぅ！」

剛直しきった男根の中を、灼熱の白濁汁が凄まじい勢いで駆け抜けていく。
どりゅんんっ！
爆発的な勢いで弾き出たザーメンが七菜子の最深部に直撃した。
「熱ッ――つくふぁあぁあぁぁっ！　す、すごっ、あっあぁ！　あっなにかっ、あっこ、これがイクッてことなのかっ⁉　あっあぁっイクっ！　いくううぅうううぅっ！」
絶頂を叫んだ直後、シャープな顎がアッパーでも食らったように真上を向く。
ビグビグビグビグビクビク！
引き締まった七菜子の全身が波打つように痙攣し、剥き出しにした喉を震わせ絶叫している。凛々しい眉をハの字に緩め、ハンサムな美貌は甘く蕩けきっていた。両手で握る乳房が、剥き出しのヘソが、自身を支える太腿が、サラサラのロングヘアごと性の歓喜に震えている。なにより男根を包む牝壺のバイブレーション気味な痙攣具合が半端ではない。
どぷどぎゅドプどぷっ！　どぎゅドギュどぷどぷドリュどぷぷンっ！
その尋常ではない反応に男根からさらに激しく灼熱液が迸る。
「らめっ、らめえぇっ！　なんか出るっ！　ア、アタシもなんかでるうううっ！」
こちらの脈動に合わせて七菜子がさらに愉悦を叫び、全身を息ませたその直後――。
プシャアァァァァァァッ！
旬平の下腹にも熱い飛沫がぶちまけられた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ http://ktcom.jp/ 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!